

津輕藩林政と入会地について(上)

長内 鉄也

序

一 津輕藩林政の概観

二 歴史的に見た林野地入会制度(以上本号)

三 官山管理と入会利用

四 入会林野地と野火

結語

序

今日でも農山村に於いては、牛馬飼料たる茅・薪、家作用材を採取する土地が存在している。これらの土地は青森県に於いては、毛草山・仲間山・入会山・木山・シクサ山・萱仕立・村山等と呼ばれ、その存在は今日に於いても依然として重要なものである。

これら入会地に於いては、茅・柴を初の薪炭材・或いは、茅の実などの食料を採取し、又共同の放牧、植林なども行われ、時には焼畑や開墾地にも使用されるが、入会地のことを毛草山・シクサ山と云っていることからして入会地で最も多く一般的に採取されるのは、牛馬飼料・薪材等であろう。金肥料が一般に普及しない時代には、茅が最も重要な肥料であつたから、肥料用の茅を採取する山野と農地とは、切り離すことのできない関係にあつた。この肥料を初め、飼料・薪炭材を採取する林野が主として入会慣行によつて利用されて来たのである。

農業生活上に必要な林産物を採取する自由は、律令時代から公認されていたが、江戸時代に至り、

用益林野が幕府・藩有林等の増大で減少して来るのは一般的傾向であつた。

徳川幕府下に於ける入会制は、地方凡例録に、一野に於いて草刈事、此以前より入組にかかる所に屋敷さかえと號或鐵目を付或境を立草刈を留る儀曲事たり所詮自分以後無異儀可成者也

慶長十四年八月四日

平日村方へ申渡可置書付享六己年二月御代官同之上村々へ申渡書付左の如し

一前々より村中入会に致し未候山林林場等は相対を以分け切持に割合申間敷事(十卷)

と見える通り、入会地を侵害し私有せんとすることとは、曲事であり、又農民合議をもつて入会地を分割することを許さないというものであつたのである。

明治政府に至り、旧慣と証跡とによつて、入会地を村持方の公有地への村民有林と認め、その村に地巻を交付して、官有地と区分したが、町村制施行後は、新市町村有林に編入され、一部は部

落有林となつて残っている。

さて旧時代の農用入会地は木曾谷に例をとつて見ても明山が全山の九割もあり、肥料・飼料の採取・牧草地として農民の手で、管理されて連々と続く草山で占められていたと云われる。(日本林野制度の研究)

然らば津輕藩に於いてはこのような農民の利用する農用入会地はどのような状態であつたろうか。今日三大美林の一つに数えられる津輕藩山林の出現はすぐれた林政の賜であり、この林政と農用入会地は津輕藩に於いて密接な関係にあつたと思われる。即ち木曾谷に於ける如く、津輕藩に於いても領内の諸山を農民が管理・使用していたと思われるのである。

そこで津輕藩の林政とその展開に於ける入会地政策について考察してみたいと思う。

一 津輕藩林政の概観

津輕藩祖為信は天正十八年秀吉より所領安堵の状を賜り、次いで文祿元年巡検使が来、封土を定

の四万七千石となし、茲に於いて津輕三郡の領主となり、以末津輕氏を称した。

為信は津輕一統の業を成就すると共に、他方国内の殖産興業にも留意し、開墾、治水、植林など富国利民の策を講じ、産業開発を行った外、未だ草創期であり、二代信牧の代に至つて、慶長十六年弘前城を築き、移城すると共に山林の繁殖を図り、田畑を開いて村落を立て、牧場を開き、青森港を開くなど種々の事業を興しているが、津輕藩の産業、その他諸制度の完備は四代信政に至りて見られるのである⁽¹⁾。

かくの如く藩初から林政に対しては、極めて大きい関心を寄せているのであるが、林政の整備するのは四代信政の時代である。

信政は林政には特別の政策を施し、林政を整備したのであり、信政がいかに山林を重視したかは次の資料より知れると思われる。

「我等一分に対して大切と思ふこと三つあり、一は家運なり、才二は土佐守なり、才三は山なり、……中略……木を不足なきようにするは山

なり、山を大切にすることは万民生命を保つことの元なれば山を大切に思うこの御意なり、又別して東奥の地は寒氣猛烈なる故山林に深く心をを用ひざれば成木難し、後世に至るまで上下能々山木に心をを用ゆべしとなり⁽²⁾」

さて津輕藩に於ける山林の種別について見るべし、すでに元和二年信牧の代に定められている⁽³⁾、即ち純然たる藩有林である本山はさておいて、柁山、見継山、仕立見継山、田山、立山、建山、館山の類である。今これらを旧弘前藩山林法より見るべし、

一 柁山

空所見立諸木植付候得共願ニ依り御竿入之上三百坪壹分宛積ヲ以御役鉢上納被仰付御證文被下置候ニ付自分持柁ニ相成候間御用木伐取之節御代鉢被下置部在三百坪壹分三千坪ニ付壹分三百坪拾文目限り其餘何程場廣候テモ御役鉢御免之事在モ御竿入之節ハ山方締役勘定人郡所物書三役出会ニテ東西何百間南北何百間ト間縄ヲ以テ考量平均横縦坪数改之事

又自分持柁之銀納畑或ハ荒畑等へ植付候分ハ柁
山同様之事

一 見継山

御本山之内伐尽跡為見継山守ニ被仰付盛木ニ相
成候分見継山ト申候隨テ依テ伐木願申出時ハ見
継之成功ニ依テ御沙汰被仰付候事

一 仕立見継山

空地見立諸木植付候ニ付柁山に願申出候共其土
地ニ寄り難被仰付部ハ仕立見継山ト被仰付候事

一 田山

元來為用水諸木植付置候ニ付仕立見継山同様伐
取願出候節ハ木立模様見分之上老木惡木之類勝
木尚代リ木植付候様御沙汰被仰付候事

一 立山（建山、館山）

仕立見継山同様空地見立之上諸木植付柁山願出
候トモ土地ニ寄り難被仰付候部建山ト唱見継山
ニ可被仰付候事

（古米定法之覺一元和二年被仰付候）⁽⁴⁾

これら山林は後世まで至ると種々改変せられ、
附加される点もあるがそれについては後に詳述し

たい。

さて次に信政の代に至りて本山は地勢に従い、
寛文七年四大林区を設定している。⁽⁵⁾

一、上山通り（碓ヶ関山林より目屋野沢山林まで

九ヶ山）

一、中山通り（前田野目山林より小泊山林まで二

十二ヶ山）

一、外ヶ浜通り（鶴ヶ坂山林より宇鉄山林まで四十

三ヶ山）

一、西浜通り（中村山林より大間越山林まで十八

ヶ山）

次に賦制に付いて見るならば、信政の宝永年間
には山方役を創設し、諸般の職制を定めている。⁽⁶⁾
今御山所職制を藩政時代総合してみると、

一、山奉行（二人乃至三人で山林事務を総管する）

一、山方吟味役（四人乃至五人で勘定奉行、山奉

行の両支配に属し、山方役所の出

納を管掌し、山奉行を輔佐方）

一、山方取締（十人で保護研伐を司る）

一、山方物書（山奉行の書記）

一、山役人（六十人乃至六十九人で山奉行、山方吟味役の指揮を受け、森林を監視し研伐を司る）

一、諸木仕立取扱（山奉行の指揮で春秋兩度造林地を監視す）

一、手付（諸木仕立方の指揮を受け造林人夫を使役す）

一、十歩一役（五人にして流木の役人で、専ら運搬を司る）

一、大山頭（目屋野沢山二人、浅セ石山一人で受持山の取締を成す）

一、郡方（地方牧民官で森林事務に当り一般行政上に關係するものに参与する）

さて津輕藩に於いては、すでに信牧の代に弘前城を築き、ために大鰐・藏館方面の山は裸山となり、更に四代信政の明暦三年には、江戸に大火があり、復興用材として、藩塙再建のためにも大量の材木が運搬されている。⁽⁷⁾

又當時に於ける林産の藩財政への寄与は、それ程大きかったとは思われないが、寛文年間には、

材木が深浦、金井沢より積み出されていたが、明暦頃より漸次藩財政も衰運に向い、山林も衰山の非が現われて来ている。⁽⁸⁾

（しかし）信政が開田や国産の扶殖に力を注いだので、趨勢は漸次挽回せられるのであるが、凶作飢饉のため挫折するに至るのである。⁽¹⁰⁾

このような藩財政及び山林の後退に鑑みて信政は特に林政に意を用い、度々諸木植林の令を發して、その植林を命じて居り、元禄七年日記よりすれば、

一、元禄七年正月廿四日郡奉行より申立諸木年々伐尽し松底ニ付在々山々巡見之上松杉桧楓の実取せ置申候時可申候。又松杉桧楓其他諸木仕立可然云々、惣山奉行を郡奉行支配ニ被仰付諸事申合田畑ニ不罷成野山諸木仕立候云々⁽¹¹⁾

とあり、更に度々杉桧その他諸木の植栽を命じているのである。又信政の代に領内の野山に植栽した数は、莫大なものである。⁽¹²⁾このような積極的植林と共に諸木の伐採制限、留山の制を設けて、山

林の後退を防ぎうとしているのである。即ち寛文四年と月には、外ヶ浜中師に留山之儀に付き山廻象に訓令を發し、八月には津輕藩留山の制を定めている。⁽¹³⁾ 寛文二年には杉松の伐採制限を命じ、⁽¹⁴⁾ 元禄二年には器具等用材の制限について令を發し、⁽¹⁵⁾ 又御家中、寺社、町人、百姓等の中で大なる家作を行ふ時は、材木の種類委細書を提出させ、支配頭の許可を必要とした。⁽¹⁶⁾ 更に元禄十四年には停止木を定めて伐採すること禁じている。⁽¹⁷⁾ 更に門松には檢を使用すること禁じているのである。⁽¹⁸⁾

かくの如く信政は一方に於いて植栽を命じ、他方森林保護のための種々の制限並に禁止令を發しているのである。

所が凶作頻発地帯である津輕藩に於いては、領民救済に対策を講ぜざるを得ず、百姓御救山なるものを設けて凶作時に伐木して、救済の一助としたのであった。凶荒時には本山を救山として解放して伐木するのである。

元禄時の凶作には八年に留山を解放しているが、⁽¹⁹⁾ 七年に三万人、八年に十万人の死者を出すに至り、⁽²⁰⁾

又享保時の凶作に於いても救山を解放し、濫伐相次いで起り林政の基礎を危くしているのである。更に武士階級の奢侈増長と藩財政の窮乏により成長量を度外視して伐採し、裸山となすものが多くあつた。⁽²¹⁾

藩では正徳五年六月六日山方役所を創設し、大目付支配に属させ、⁽²²⁾ 山を管理する他、地方人をも保護に當らしめたが、山役人の背仕のため努力が上からず、宝暦年代に至りては、諸山伐尽の形となつた。⁽²³⁾ このような状態を黙視できず、宝暦三年乳井賣は山林の大改革を行い、山役人を引上げ山下兒継に改めている。この改革はよく山林を保護したが、急速には盛山に回復しなかつた。この結果、明和八年には町村有の抱山を認める布令を発するに至り、荒廢せる山林を回復せんとしたのである。(これらについては、後述する)

この抱山制度は荒廢せる山林を回復するに効果があつたと思われるが、⁽²⁴⁾ 安永六年譜山一統山下村へ引荷被仰付御代官山方面半之取扱被仰付候中略……然処卯年(天明三年)凶巖之御為御救

諸山一統開山被仰付悉ク伐尽ニ相成……下略……⁽²⁴⁾
とある如くこの間天明三年の大凶作に会い、死者
十万人を数え、藩にては又もや御救山・禁伐の屏
風山さえも切り出し、諸山荒廢裸山となるものが
多かった。

寛政年間に至り、改革の七象赤石安左衛門、菊
地寛司、楠美莊司、工藤甚之助、竹内長左衛門、
三橋勘之丞、成田祐左衛門が登用され、その国富
の建白書に「本土收入数により支出の額を節し、
之を行ふに宜しく先づ豪商に償ふ米を停むるにし
かず、十年間これを行へば上国豪商の供給を借ら
ずして、賤必ず足るを以て、衆土を邑里に移して
廢田を開墾せしめ又々籍を嚴にして工商の員数を
定め、浮浪者を驅り、農に帰せしめ、次に山林法
制を立て以て木材を養うにあり」と述べ、又「諸
山は国の宝なるに今迄は山師と云うものの手にて
私入をなし諸材を商人の手に渡したり。元来私入
の事は、廻り伐とて山々の邊さぬように伐べき定
なと、山師とも奸計にて山法に背きたるゆへ、山
々薄立となりたり。その上凶荒にて諸山を尽し、

諸材の乏しきと一方ならず、依て今までの大目
付山方取扱を止め新に山奉行を定の官舎を山々に
立可に成人を置き年采の風義に泥ます成山の規則
を立へし」とあり「寛政諸山の仕向」が寛政九年
に公布されるに至つてゐるのである。⁽²⁵⁾

諸山仕向之趣

一去卯年以來御郡内惣御山伐尽ニ相成其上不締
奸曲之義も有之是迄之姿ニ而ハ所詮盛山ニ至
兼候ニ付山奉行御役も差立大目付是迄之扱向
相讓吟味役より山役人迄一統心を入年采之風
義ニ不泥格段之規矩相立盛山ニ至る様精勤相
勵候様被仰候

一山役人山方番所一統引拂之上御本山并田山館
山仕立山方共山下村々兩締ニ被仰付候ニ付代
官引担山下申合之上御締合相立候様被仰付候。
(後略)

この寛政の林政で一応の盛山となつた様である
が、文化、文政頃に至り、藩費支出大となり、極
度の財政窮乏に陥り、材木の伐採量は、生産量を
はるかに超え、養山の非が現われて居り、当時の

伐木量・移出量を見ると、

年中入用太部（旧弘前藩山林法）

寛政十三年頃

材木 拾万本

柁 十萬枚位

木柁 四十万本位

文化二、三年之頃

材木 六十万本

柁 九百萬枚

木舞 三十万本

文政元年之頃

材木 六七万本

柁 十二百万枚

木舞 四十万本位

外に江戸御登仕御用材等年々夥敷柳柁共被仰付候

とあり、文化、文政年間に至りて材木の需要が多くなつて居るのであり、外に移出する冲枵材木も文化十年から文政十年までの十五ヶ年の内に惣高四拾万石位であるとしている。このような状態を

黙視できず、漆守三上源助は復興のため「樹芸趣意」で上申したが、天保の凶作に会い、又もや領民救済のため伐取を自由にしたので盛山とならずに終つた。⁽³⁰⁾

然るに嘉永、安政年間に至り御山の取締を嚴重にしたので、治績が上り現在の三大美林の一つと数えられるに至つたものと思われる。

註

(1) 東北産業経済史才五卷一（二頁）

(2) 信政公事蹟

(3) 旧弘前藩山林法（古来定法之覺）元和二年被仰付候

至青森県総覧山林史（四八の頁）には、これらの山林の種類について述べ、柁山、見継山の設立を夫々天和二年、天和年間としているが「旧弘前藩山林法」によれば、柁山、見継山、立山、仕立見継山、田山は、「元和二年被仰付候」とあり、元和年代設立となっている。今日本林制史資料弘前藩中寛文四年日記よりすれば、立山

について禁令を発していることが見えてゐるので、すでに天和以前、元和年代にこれら抱山、児継山、立山らが設立されていたものと思われる。

⑤青森県総覽山林史四八〇頁、東北産業経済史才五卷二四八頁、

⑥青森県総覽山林史四八〇頁

⑦青倉跡ハ、津軽藩山林法に於ける五人組制度」
(うとう二四号)

⑧日本林制史資料、弘前藩覽文四年六月十一日、日記

一去年東廻ニ指登セ寒沢ニ冊候御船頭清右衛門船虫口ニ申兼て申越候付則村田和右衛門船より右之清右衛門船之中物枝木積江戸へ大廻ニ五月二七日着岸之由ニテ上乘三橋与矢衛下着一大坂へ登セ候材木船廻り狀貳通牧只右衛門渡遣ヌ但船頭藤十郎孫五郎也

⑨東北産業経済史才五卷十頁

「是迄は豪家も多有之、且米穀並下ノ切原子山初諸山材木等多湊出有之故船之通路不絶繁昌

之處此已後逐年衰微ニ至という」

⑩東北産業経済史才五卷十頁

⑪日本林制史資料、東北産業経済史才五卷二六八頁

⑫日本林制史資料、弘前藩中に植林の記録が数多く見えてゐる。

⑬津軽藩日記——寛文四年八月

一中師御留山西八薄市小またおちあい切大川より北の方沢々東ハ火箱沢までの内先年より御留山に候間松木一本もとらせ中間敷候事(後略)(青森県史一、四四二頁)

⑭寛文二年日記(日本林制史資料弘前藩)

(寛文二年八月)
一十八日碇ヶ岡山、三免内、虹具山、大沢、相馬山、目屋の沢山より杉、松の類とらせ申間敷由但屋材木の今ハ其所代官又ハ給人ハ主人方より断ニて下需次才とらせ可申由御礼六枚迄相立其所代官才一申渡之。

⑮日本林制史資料弘前藩、七九頁

(御條目並町中に申渡控)

覚

一 献上物之合上松杉無用仕何木ニ而も用之かき
なとも輕いこし足ハ桧杉之外何木成共仕ニ重
くり相止ひきく可仕事

右の通來午正月より改之可相守者也

元禄二年己八月廿八日

(16) 日本林制史資料弘前藩八〇頁

覺

一 御家中寺社町人百姓の内ニ而も表向作事或大
成家玄作り候節大戌木玄伐出候而用不申不叶
子細有之候ハ人頭或支配其子細承届材木何本
何々之木何本山入付望之段書付出其書付ニ頭
支配方ニ而裏判仕月番御用人まで申達可仕差
図事

元禄二年己十月十日

町奉行所

(17) 元禄十四年七月二十四日日記(日本林制史資料
弘前藩)

一 山奉行山元三郎左衛門左之通御停止木之儀申
立候

山漆、槐、楓、桐、松、桧、杉、榎、
針

一 桂、栗、朴、(下略)

(18) 享永六年二月十九日日記(日本林制史資料弘前
藩)

一 御本山 日本林制史資料弘前藩五八〇頁

右御本山より生木伐取願候之儀ハ難被仰は候事
ニ候得共臨時之御救之數伐取被仰付候義も有
之候

(19) 元禄八年日記十月二日(日本林制史資料弘前藩)

一 外々安御留山之内湯之沢藤ヶ沢高石ヶ俣此三
ヶ所今度明ヶ申候……略……当年者不作ニ付
其近郷爲渡世申付之旨郡奉行江申渡之左町人
山入付願申者有之候哉町中江相缺可申旨町奉
行江申渡之

(20) 青森県史卷二、(六二頁)

元禄八年納り米糶穀とも漸々四万石余なり十月
より十二月まで餓死者三万人余といふ(工藤家
記)

(21) 肴倉弥八「弘前山林法に於ける五人組制度」(

うとう二五号)

(22) 旧弘前藩山林法(御山方最初之事)

一御郡中御山方正徳五末年六月六日大目付文記

被仰付候御山方役所被差立山方吟味役御馬廻

ヨリ四人加勢締役二人漆奉行次順ニテ物書ニ

人被仰付候

(23) 宝曆三年日記、平山年代記四(日本林制史資料

弘前藩)

(24) 旧弘前藩山林法(諸山諸木取扱之事)

(25) 青森県史

(26) 東北産業經濟史才五卷三二三三四頁

(27) 寛政御仕向之覚、寛政九年丁巳四月

日本林制史資料弘前藩四々四頁

(28) 東北産業經濟史才五卷四十四頁

「世人日笠陳八郎兵衛巨万之助力を尽し御国殆

んど空耗及御借賤己に七十万兩に至り常に同僚

下官之趣を不用権威に募り隨意之取扱法津渡的

切と申唱候(工藤家記)

(29) 沖拂杓木文化十酉年ヨリ文政十亥年迄十五年之

内ニ惣高大部四拾万石位伐取ニ相成候右之外弘

前上ヶ榎本舞年々杓取致候江戸御登世先ニ青森

御常用共年々杓取右之候誠ニ山八宝也……略……

(旧弘前藩山林法)

[30] 前掲「津軽藩山林法に於ける五人組制度」

[31] 前掲論文

二 歴史的に見た林野地入会利用

農業や生活上に必要な林産物、即ち肥料としての刈藪、耕作牛馬の飼料、薪炭材、家作用材を採取する自由は、律令時代から公認されていたが、

荘園時代になると山野の独占を企てる権力者が多くなり制限を受けるようになった。しかるに封建

制の確立と共に所屬不明の林野地は、藩有に編入

されたが、農民は慣習上共同収益し來つた林野を

なくしては、農業を営み、生活をなすことができ

なかつたのである。このように重要な林野地立

入が藩政時代にどのような状態であつたのであ

うか。

今津軽地方に於ける代表的な林野地である岩木山について見るならば、岩木山を一括知行所とし

ていた百沢寺によつて、一七世紀初頭に林野地立
入が禁止され、追い出しに会つてゐることが分る。

一 岩不虚空藏堂永代可爲女人禁制榜示者東西限

山路南北限林際事

一 結界山中諸木剪採并牛馬等牧入輩可令罪過事

一 結界山林辺牧野火時者坊中村中者共相集可被

申付事

右條々百沢寺并脇坊爲衆徒中監法度旨可有制
法者也

寛永六載己巳首夏廿七日

百沢寺⁽³⁾

信牧

これは信牧と百沢寺との共同で出された禁令で
あり、オ一條には百沢寺知行所の範圍を決めて居
るのであり、オ二條は木を剪り牛馬を放牧したり
すること禁じてゐるのであり、このことはこの
広大な林野地から農民を追ひ出す意図を示してゐ
るのである。又農民がこの禁令の出される一七世
紀初頭まで現実にこの林野地を利用してゐたこと
を示してゐると思われる。更に享保十二年日記よ

りすれば、この岩木山境内と同様領内の諸山への
立入りが禁止されないまでもある程度の制限が加
えられていたのではないかと思われる。

かくの如く見れば一七世紀初頭までは、津輕地
方の農民は岩木山のみならず、領内の諸林野地に
自由に出入りし、その毛上を利用してゐたものと
思われる。

なほに当時このような禁令を出すに至つたのは
明らかでないが、これまで続けられて来た旧慣
たる薪伐採取牛馬の放牧、野火等が禁令を必要と
する程はけしさを叩き、更に津輕藩に於いては既
述の如く林政に非常に留意してゐたのであり、そ
の管理保護のため、即ち農民の入会利用する土地
の荒廃を防ぎ以つてその利用を便宜ならしめよう
とした結果からではなからうか。このような禁令
が出されても林野を収益利用しなければならぬ
農民にとつては、禁令通り守ると云ふことは難し
く時間の経過と共に事實上無視されるに至つたの
ではないかと思われる。

更にこの岩木山麓を入会利用してゐた農民にと

つて、地続きのニヶ所で利用や占有を許さない場所が生じている。即ち一つは承応二年の設置と云われる岩木山の南西に続く枯木平の藩牧である。

この他、津軽坂へ東郡鶴ヶ坂、雲谷へ東郡横内村、入内へ東郡高田村、滝沢へ東郡東岳村の四藩牧も又設置されているのである。

他の一つは天和二年設置の廻堰清水森を起矣として岩木山麓を横切り、北方に延びている屏風山である。

かくの如く岩木山麓の南側で採草の機会を求めていた農民は、藩牧の設置で草地から締め出され更に北側に於いて新田開発のため草地の狭小化に会つていたのである。

すでに述べた如く、初期の過大な木材需要により、山林の荒廃を招いたことが原因で、山林に対する領主の管理がきびしくなり、藩林が確立し、又農地の開拓が進むにつれて、従来の用益林野が減じ、反対に毛上の採取量が増大するなどの理由で林野の用益が次第に不自由になつて来るのであるが、これに加えて、正保二年の検地、更に貞享

元年の総検地を経て、水田耕作農民の電納強化の過程に於いてこれらの耕作農民の生活を最低限に保障するため、更には度々饑饉に対処し、農業生産の最高能率を発揮させるため林野への立入りを抑えて置くことは、やがて不可能になると思われる。

このような経済状況からして遂に享保十二年には林野への一般的立入りが認められるようになった。

一野山遠き在々ニ而馬草新不自由故別而致困窮
候旨相聞候向後留山立山松山袋などへ入候而
馬草を刈苅等並候而致薪候義勝手次才ニ申
付候下然諸木ニ障或ハ一本茂伐取候様成儀見
當候共一村切人別過料可申付候間堅相守候様
可申付事

かくの如くともかく官山とされる所に下草や薪材の自由採取が公認されるに至り、領内の諸林野地に多数押しかけるに至つたと思われる。

更に先に述べた岩木山境内には、前述した如く禁制はそのまま守られないであろうとしたが、す

で、貞享以前には、各沢の入会を公認する「小沢分帳」があつたと云われているのであり、この岩木山麓の入会を判然と知り得るのは、寛政九年に至りてのことである。この時に「岩木山境内小沢分帳」なるものが、百沢寺によつて記録され、それが公認されてゐたのが分る。今これをあはてみると、

岩木山境内小沢分帳

覚

岩木山境内江入棒切根柴伐取萱馬草等刈取候村々左江申上候

一、……略……

一、……略……

右者寛政九丁己年取調書上表ニ御座候

岩木山境内前後左右之山々沢々より諸組村々ニ而根柴伐取萱馬草等刈取方先年より入来候村々前書之通九十三ヶ村ニ御座候右岩木山後西永代村道切

……右之通當山境内相違無御座候以上

七月 百沢寺

この小沢分帳の作成されたのは寛政九年で、先年

より入来候」とある如くすでに寛政をさかのほる数十年前から岩木山境内を入会利用してゐたようである。この書上表で藩に報告してゐるのであるから、藩に於いては領内の諸林野地を調査したのではなからうか。

かくの如くして寛政年間に至りては、領内至る所が入会利用されてゐたであらう。所で前述した藩牧も又農民の利用する所となつた。即ち藩牧は年中放牧して経費の節約を図る法であつたが、實際上かへつて下経済となり、宝永三年半牧半舎の方法に変わり、文化年間にはこれら藩牧はすべて農民の採草地として解放してゐたらしい。(14)天保以後四牧、津軽坂、入内、雲谷、枯木平は廢止となり、農民の採草地として全く解放された。(15)

注

(1)郷土史辞典三七〇三九頁

(2)土地所有権史論五三二頁 石田博士

(3)日本林制史資料弘前藩、一頁

「津軽旧記類草稿四五古記大全三」

(4) 日本林制史資料弘前藩、三七四頁

「享保十二年に馬草薪不自由に付以後留山立山松山袋などに入りて刈取り勝手」としてゐるので、このことからして享保十二年以前は或る程度の制限を加えられていたと見る事ができよう。

(5) 宮下利三「岩木山麓の採草地について」

(6) 青森県総覽畜産史、五〇九頁 青森県農地改革史(四一頁)に於いては、天和三年四月の設置であるとも云われ、不明である。

(7) 青森県農地改革史四一頁

これら四牧の設置年代は明かでない。

(8) 前掲、宮下論文

(9) 青森県史才一卷、八四四頁

(10) 享保十二年正月四日日記(日本林制史資料弘前藩三七四頁)

(11) 青森県史才一卷、九一四頁

「岩木山百沢寺知行所にして山野取締は山奉行之管理し、該山柴刈りは奥享以前より小沢分帳に基き村方刈取場所一の区域を立て

変更すべからざるものなり」とあり、但百沢寺に於て人馬入用の時は、隨時小沢分帳の村方に割付け使役せしか其他課税なし」

(12) 岩見文庫(弘前図書館所蔵)

(13) 東北産業經濟史畜産史

(14) 旧弘前藩山林法の文化七年の記録よりすれば、

一 近年出生駒不足ニ相成候……兎角秣場所不足

ニ相成存念通行届兼候処ヨリ去辰年(文化五年)山下組合へ新ニ御割ニ相成候秣場所并先年

ヨリ御割渡秣場所共一ヶ年休ニ焼払……略……

とあり、去年ヨリ御割渡秣場所と云うのは、藩牧の事ではないかと思われ、この時から徐々に農民に割渡解放していったものと思われる。

(15) 東北産業經濟史才五卷